

在日短期留学生の地域交流に対する認識と参加決定のプロセス

阿部 祐子

要 旨

本稿では、在日短期留学生の地域社会との交流に対する、関心度、参加・不参加の決定プロセスとその要因、交流体験の認識とその変化について検討した。26 人の短期留学生(アジア系、欧米系ほぼ同数)を対象に半構造化面接を実施し、質的分析を行なった結果、①高関心・継続型、②中関心・継続型、③中関心・不継続型、④低関心・不継続/不参加型の4つに類型化された。①②は、環境や体験を肯定的に認識し交流を継続する者が多いこと、③は、体験を否定的に認識している者が多いこと、④は、環境や体験を肯定的に認識しても交流は継続されないことなどが見出された。交流体験による認識の変化に関しては、特に交流継続者に、地域交流への関心の喚起、地域文化や個への関心の深化、コミュニケーション法の変化、自己効力感の向上などの有意義な学びが多くみられた。分析結果をもとに、今後の支援体制や交流のあり方についても検討した。

【キーワード】 地域社会、 地域交流、 短期留学生、 認識の変化

1. 問題の所在と目的

国際競争力の向上、少子化や学生層の多様化への対応など、様々な課題を抱える今日の大学を取り巻く状況の中で、大学の地域社会への貢献は、教育や研究機能と並び、今や大学が存続していく上での不可欠な機能となっている。中央教育審議会答申「わが国の高等教育の将来像(2005)」では、教育、研究に続く「第三の使命」として、大学の社会貢献の役割の重要性を強調している。中でも急速なグローバル化社会への対応のため、大学で受け入れる留学生との交流による国際化への期待は著しい。文部科学省は、留学生政策懇談会(1997)において、留学生と日本人学生や地域住民らの交流活動の有益性を強調し、大学の積極的な支援を推奨している。

一方、地域社会側の現状をみると、一昔前に見られたような親密な地理的コミュニティは減少し、人々の所属感も希薄になりつつある。特に地方においては、コミュニティそのものが高齢化や過疎化により危機に瀕している。その対策として市町村の統合が行なわれ、地域おこしや観光誘客の試みなど、地方自治体を中心に開かれたコミュニティへの住民

の意識改革が迫られる時代となっているが、それは容易ではなく、地域活性化は我が国における大きな課題となっている。このような状況において、留学生の人的、文化的リソースを活かした地域社会との交流の推進は、白土・高松(1999)が「日本人の閉鎖性への挑戦となりうる(p.40)」と述べているように一つの突破口となる可能性を持つ。江淵(1997)は、留学生受け入れ理念を7つのモデルに分類し、留学生交流を地球共同体の形成に役立てるものとして、「地球市民形成モデル」を提示している。これは「国際理解モデル」を進化させたもので、「留学中住んでいた地域の人々との交流の輪が地球上に拡大する契機を与える(p.123)」効果をもつと述べている。留学生にとっても、このような積極的な受け入れ方針が望ましい変化であることを考えると、留学生の地域社会との交流は、大学、地域社会、留学生の三者にとって有意義な試みであるといえよう。

以上のような現状を踏まえ、日本語教育、異文化理解教育、多文化共生など様々な分野において留学生と地域社会の交流実践研究は増加の傾向にある。横田・白土(2004)は地域との交流コーディネーシ

ョンの実践を分析した後、事例として福岡市と九州大学、及び国立市と一橋大学についての詳細を紹介している。また、先述の「地球市民形成モデル」につながる成果としては、武田（2002）が、新潟県の国際大学とボランティア組織「うおぬま国際交流協会」との交流を報告している。また、「総合的な学習の時間」や2011年より必修化された小学校の外国語活動に関連する小中学校での交流活動には、多くの事例がみられる（大島・田村2001；花見・橋本2001；久保田2003など）。留学生と日本人の1対1のプログラムとしては、東京大学留学センターでFACE（Friendship And Cultural Exchange）が、1997年より実施されている（大西2008）。

このように近年では、大学における留学生と地域社会の交流は活発になり、関連研究も蓄積されつつあるが、それらは交流推進者や支援者の観点から捉えた研究がほとんどで、実際に留学生が地域社会との交流に関心を持っているのか、またどのような理由で地域交流に参加し、それをどのように認識しているのかなど、留学生の観点に着目した研究は、管見のところ見当たらない。特に留学期間が1年未満の短期留学生については、地域住民との接触を全く持たないままに帰国するケースも充分考えられるが、その限られた留学期間中の地域交流をどのように位置づけ、捉えているかを理解することは、今後のより有効な交流プログラムや支援のあり方を考えていく上でも重要であろう。

そこで本稿では、短期留学生は地域社会との交流に①関心があるか、②どのように参加、不参加の決定をするのか、③交流をどのように認識し、それは実体験によってどのように変化するのか、の3点について明らかにし、今後の留学生と地域社会との交流促進について考察することを目的とする。

2. 本調査の背景

今回フィールド校となるのは、秋田県にある学生数800人ほどの小規模な公立大学で、国際社会で活躍できる人材育成を目指し、キャンパス内の国際的な環境を重視している。留学生は、全学生数の約20%を占め、大半が提携大学（2013年4月現在41

カ国149校）からの1年間の交換留学生で、欧米系とアジア系の学生の割合は、約2対1である。日本語教育以外の授業が英語で行なわれていること、約半数の教員が外国籍であること、学内では日本人学生も教職員も英語を話すことなどから、学内にいる限り日本語が理解できなくとも生活に支障はない。受け入れ条件として留学生もTOEFL500点以上の英語力を求められているため、共通言語は英語となっている。

留学生は、全員キャンパス内の寮または隣接した学生用アパートに住んでいる。周辺は豊かな自然に囲まれているが、娯楽施設や店はほとんど見られず、公共交通機関へのアクセスもよくないことから、地域社会との接触は限られた環境にある。留学生支援に関しては、学生支援チーム、英語が話せるカウンセラー、アカデミックアドバイザー、日本語教員、学生によるボランティア、寮のRA（Residential Assistant）などが連携して協働しており、学内の支援体制は比較的よく整備されている。また日本人学生は、英語による授業に加えて、1年次の留学生との共同の寮生活や提携大学への1年間の海外留学などが義務づけられており、語学学習や異文化への関心は非常に高いといえる。

留学生がアクセスしやすい地域交流は、学内の2箇所の部署で行なわれている活動が中心となる。1つは、企画部地域交流チーム（Community Outreach Service 以下COS）が、授業外活動として提供しているプログラムである。日本人家庭への訪問・滞在のプログラム、各種フィールドトリップ、地元教育機関での英語教育活動や自文化紹介活動、地域で行なわれる様々なイベントへの招待などがある。イベントは、伝統的な祭りの参加や見学、餅つき、地元料理試食、田植え、稲刈り、果物収穫などの農作業体験など、地域に根ざした多様な種類がある。COSのカウンターには、日時、内容、募集人数などが書かれたサインアップシートが用意されており、学生は自分の関心のあるものに申し込む。交流プログラムは平日に行なわれるものも多いが、授業を休んでの参加は認められていない。もう1つは、「地域環境センター（Center for Regional

Sustainability Initiatives 以下 CRESI)」からの紹介である。CRESI は、「自然環境・伝統資源の持続的 management に関する学術調査を実施し、その成果を学問的分野だけでなく実際の地域活性に展開しその発展に貢献すること」を目的とした学内センターであるが、モニタリング調査や実践研究のために学生をアルバイトとして雇用したり、ボランティア参加を呼びかけたりしている。これ以外にも学生課主催で行なわれる季節の観光地へのバス旅行や、授業内で行なわれるフィールドトリップなどがある。

3. 調査・分析方法

2008 年 7 月から 2009 年 3 月に 18 人、2010 年 2 月から 3 月に 8 人の在日短期留学生を対象として、留学中の地域社会との接触やその内容に焦点をあてた半構造化面接調査を行なった。

最初に調査目的と守秘義務の説明をし、基本情報としてフェイスシートの記入を依頼した後、面接を行なった。質問項目は、①日本到着時の地域社会の人々との交流への関心度、②実際に地域交流に参加しているか否か、③交流参加、不参加の理由、④交流体験とそれによる変化、の 4 項目で、これらについて自由に語ってもらった。対象者の属性(表 1)は、アジア系と欧米系の割合がおよそ 6 対 4、日本語レベル(学内の日本語プログラムに準ずる)は、初級 4 名、中級 18 名、上級 4 名で、ほとんどの学生が調査の時点で 8 カ月から 12 カ月間、日本に滞在していた。面接時間は 30 分から 60 分で、主に日本語で行なわれたが、日本語でコミュニケーションが充分に取れない場合は英語で行なわれた。面接結果は対象者の許可を得て録音した後、文字化し、KJ 法(川喜田 1967)を中心とした質的分析を行なった。具体的な手順は以下のとおりである。まず、質問項目①の交流関心度についての回答を、高中低の 3 グループに分類した。次に各グループを質問項目②の実際に地域交流に参加しているかの回答により類型化した。その後、②③④の回答から地域交流への参加、不参加の決定要因に関連すると考えられる言及をタイプごとに抽出し、KJ 法の手法を用いて質的分析を行なった。手順としては、内容をカー

ド化し、似通った内容のものを集めてラベルを付けて小カテゴリーに分類し、それを次第により大きなカテゴリーへと分類した。さらにそれを、「参加あるいは継続参加」のグループと、「不参加あるいは参加不継続」のグループに分けて要因を検討した。交流体験による認識の変化についても同様の手続きを行なった。その後、カテゴリー別の典型事例について対象者の語りを引用しながら考察した。

なお、フェイスシートの中で日本への留学目的を尋ねたが、対象者の 9 割以上が留学目的の筆頭に日本語の上達と日本文化への関心を挙げた。ここでいう文化には、伝統文化及びアニメ、マンガ、ゲームなどの大衆文化、また日本的な考え方や慣習の理解、ビジネス文化が含まれる。それ以外には、友だちを作る、旅行、英語による授業の単位取得などの回答があったが、地域社会との交流を明確な目的とした回答は得られなかった。

表 1 対象者の属性

対象者	性別	出身国	日本滞在歴	日本語レベル	交流関心度
A	女	中国	1年	中級の上	高
B	男	香港	1年	中級の上	高
C	男	英国	1年	中級の上	中
D	女	英国	7か月	中級の上	中
E	男	豪州	7か月	上級の下	高
F	女	台湾	7か月	中級	中
G	女	台湾	7か月	中級	中
H	女	台湾	7か月	上級の下	中
I	男	英国	7か月	中級	低
J	男	スウェーデン	7か月	中級	低
K	女	スウェーデン	7か月	中級	中
L	女	マカオ	7か月	中級の上	中
M	女	マカオ	7か月	中級の上	中
N	女	マカオ	7か月	中級の上	低
O	女	韓国	7か月	中級の下	中
P	女	韓国	7か月	初級の上	中
Q	女	シンガポール	7か月	中級の上	中
R	女	ドイツ	7か月	中級の上	高
S	女	韓国	7か月	中級の上	中
T	女	韓国	7か月	上級	中
U	男	チェコ	7か月	初級の上	中
V	男	ドイツ	7か月	中級	高
W	女	ドイツ	7か月	中級の上	低
X	女	台湾	7か月	上級の下	高
Y	女	マレーシア	7か月	初級の上	高
Z	男	米国	7か月	初級の上	中

4. 結果と考察

4.1 地域交流に対する関心

まず質問①の回答から、日本到着時の地域交流への関心について検討した。その結果、地域交流への関心が高いと回答した者は7人、低いと回答した者は4人、どちらともいえないと回答した者は、15人であった(表1)。

関心が高いと回答した者は、日本語上達や日本文化への理解を深めるといふ留学目的を達成するためには、日本人との交流が必要であると考えてる者が多く、好奇心旺盛で何にでも積極的に取り組もうとする姿勢が語られた。例えばAは、「(日本人の日常生活について)全部知りたい。例えば、何時に起きて、朝ごはん何を食べて、何時に帰ってきて、夕ごはんを食べて、テレビを見る。何を見るか、本当に日常生活について全部も知りたい」と交流関心を語っている。交流関心が低いという回答は、「英語でビジネスの授業の単位がとれるからここに来た」

(W)のような「留学目的の相違」また、「日本人は仲良くなるのが難しい」(N)というような「否定的な認識」そして、「大学の中でたくさん日本人の友達がいるから、外に行かなくても大丈夫」(J)というような「学内での交友関係で充足」の回答であった。関心度について最も多かった回答は、「なんとなく」や「条件や状況次第でどちらともいえない」という「中程度の交流関心」であった。

4.2 関心度と交流継続決定の関連

関心度と交流参加決定の関連を検討するため、各グループを「実際に地域交流に参加しているか否か」の回答により分類した。交流参加は1度ではなく、交流参加を継続的にこなしている者や、以前は交流に参加していたが、その後参加をやめてしまった者が多くみられたため、今後は、継続的参加および、参加不継続・不参加という呼び方をする。

地域交流への関心が高かったグループは、全員が継続的に交流に参加していた。交流関心が中程度だったグループは、継続的に参加を続けていた者が8人、参加をやめてしまった者が7人であった。関心度が低かったグループのうち1人は、全く交流に参加しておらず、それ以外の者も継続して交流参加を

している者はいなかった。以上の結果から、関心度と交流参加・継続決定の関連を「高関心・継続型」「中関心・継続型」「中関心・不継続型」「低関心・不継続/不参加型」という4つに類型化した。

次に、関心度の違いが、どのようにして4タイプに分類されたかを検討するため、質問項目②③④の回答から交流参加/継続、または不継続の決定に関連する項目を抽出し、KJ法にて分析した。その結果、各グループに「環境の認識」と「体験の認識」という2つのカテゴリーが得られ、両カテゴリーとも下位カテゴリーとして「肯定的認識」、「否定的認識」が得られた。結果の個別データを表2に示す。以下では、関心度別に対象者の語りを引用しながら詳細を検討する。なお、括弧内の記号は対象者を示し、回答の引用は留学生の答えたままとする。

4.2.1 高い関心

高い関心の「環境の認識」カテゴリーは、環境への「肯定的認識」と「否定的認識」の2つの中カテゴリーから成る。「肯定的認識」は、「外国人への好意的認識」「留学生出身国への関心」「整った支援体制」「支援獲得の容易さ」「容易なコミュニケーション環境」「容易な友人関係構築」の下位カテゴリーから構成されている。外国人である対象者やその出身国に関心を示して、スーパーや居酒屋などで気軽に話しかけてくれるような好意的な地域社会の環境や、学内で支援が受けやすい体制が整備され、心理的、道具的などの支援が提供される環境が、地域交流を促進していることが伺える。英語の通じるキャンパスで寮生活を送るというフィールド校の特殊な環境は、それをコミュニケーションや友人関係構築の容易さ、支援の得やすさなどに結びつけて肯定的に認識されている。環境への「否定的認識」としては、「日本語環境の少なさ」として1人が挙げている。

「体験の認識」では「肯定的認識」のみで、「否定的認識」回答は得られなかった。「肯定的認識」の下位カテゴリーとしては、「日本社会の実体験」「楽しみ」「日本語使用機会の増加」「もてなし」「学びの実感」の5つが得られた。地域特有の行事や祭りに招かれて楽しい体験をした例や、食事や観

光案内など心のこもったもてなしに感動した様子などが多く語られた。また、日本語しか通じない相手とコミュニケーションをとることや伝統文化に直接触れることによって、学びを実感している様子も言及された。例えばVは、その様子を「いつも秋田 people は、日本語、秋田弁で話します。そして（私が）『わかりませんでした』と言うと同じことばを使います。だから…何回（も）聞きます。…いい練習」と述べている。「日本社会の実体験」は「方言を含め自然な日本語に触れられる」「学内ではできない体験」「話題の多様性」「幅広い年齢層の人々との出会い」などが挙げられた。Xは「大学は自分の家のような場所、間違っても大丈夫。すぐ英語に換えられる。外は本当に話せないとわかってもらえない」と述べている。交流時の話題としては、嫁姑の話、離れて暮らしている子供のこと、ペットのこと、雪かきの仕方などが挙げられた。Rは地域独自の文化や方言に温かみを感じたことを「おばあさんと話したら、ときどき方言が出てきてわからないことばもありますが、本当の日本人の心があって温かい」と述べている。

4.2.2 中程度の関心

中程度の関心は、「環境の認識」と「体験の認識」の双方とも「肯定的認識」「否定的認識」の2つの中カテゴリから成る。「環境への肯定的認識」は、「外国人への好意的認識」「整った支援体制」「支援獲得の容易さ」の3つの下位カテゴリから、「環境への否定的認識」は、「立地条件の悪さ」「きっかけなし」「多忙」「外国人への差別」「日本語環境の少なさ」の5つの下位カテゴリから構成されている。

「体験の認識」に関する「肯定的認識」の下位カテゴリは、「高い関心」と同様で、内容も類似していた。体験の「否定的認識」では、「期待外れ」「会話不成立」「差別的体験」「文化的差異への戸惑い」の4つの下位カテゴリが得られた。最も多かったのは「期待外れ」で、地域交流により日本人と親密になれると期待していたが、結局は表面的な話しかできないことを否定的に受けとめた回答である。例えばHは「みんな挨拶してるけど、深く話はしな

い。（電話）番号交換してますけど…深い話題とかはあんまり話さない」と関係に不満を述べる。また「陶芸を作る活動に参加して4回会ったけど全然。そのときだけです…（継続的に参加しても）そんなに簡単に友達にならない」（F）のように、日本人との親密な関係が期待どおりに深まらないことに失望している様子が多く語られた。また「話してみたいことが多いけれども、秋田の人が外人を見たら、たぶん全く日本語ができないイメージが強くて、ちょっとあきらめようって…」（D）のような「会話不成立」「アジア人への差別体験」「本音と建前があって、わかりにくい」（C）など「日本特有の文化に対する戸惑い」も否定的な印象につながっていた。

4.2.3 低い関心

低い関心の「環境の認識」は、「否定的認識」のみで、「立地条件の悪さ」「きっかけなし」「経済的困難」の3つの下位カテゴリから構成されている。また「体験の認識」カテゴリについては、「肯定的認識」「否定的認識」の2つのカテゴリから成り、「肯定的認識」では、「日本社会の実体験」「楽しみ」の下位カテゴリが、「否定的認識」では、「期待外れ」の下位カテゴリが得られた。彼らの交流参加理由は、「友達に誘われて」「授業として」など外発的動機による場合が多く、交流環境や交流体験を肯定的に認識しても、再度参加しようとはしていない。

4.3 交流参加継続・不継続の決定プロセス

次に、4.2で類型化した4つのタイプ別に、関心度別にそれぞれの対象者がどのようなプロセスを経て交流参加の継続・不継続を決定したのかについて検討していく。

まず「高関心・継続型」は、交流環境、交流経験を肯定的に認識し、それによりさらに交流関心が高まり、継続的に交流参加を続けるというプラスの循環をたどる者が多い。日本語環境に関しては、否定的な回答もみられたが、それを原動力に変えていることが伺える。例えばRは、「大学はちょっと artificial など…英語ができるし、でもそれ以外の全然英語ができない人と…仲良くしたいし、意見とか考え方とか聞きたい」とキャンパス内では得ら

れない現実社会との接触を求めている。

次に「中関心・継続型」であるが、環境については肯定的にも否定的にも認識しているが、体験についてはほとんどが肯定的に認識している。「交通の便が悪い」、「田舎」など、大学の立地条件の悪さ

や日本語環境の少なさは、支援体制の整備やそれを得やすい環境によって補われ、プラスの交流体験によってさらに継続的交流へとつながっていくことがわかる。例えばKは、日本語で会話するのが困難な状況を、「日本人の友達がいるけど、その友達は

表2 関心度と交流継続参加、参加不継続の要因

関心度	人	環境の認識				体験の認識				変化																												
		肯定的		否定的		肯定的		否定的		肯定的	否定的																											
		外国人への好意的認識	留学生出身国への関心	整った支援体制	支援獲得の容易さ	容易なコミュニケーション環境	立地条件の悪さ	きつかけなし	多忙	経済的困難	外国人への差別	日本語環境の少なさ	日本社会の実体験	楽しみ	もてなし	日本語使用機会増加	学びの実感	期待外れ	会話不成立	差別的体験	文化的差異への戸惑い	地域交流への関心の喚起	コミュニケーションストラテジーの獲得	自己効力感の向上	日本語学習意欲増進	日本語理解の深化	日本語力向上	あきらめ	日本語学習動機の減退									
高 (7)	A	●	●	●									●	●	●							●																
	B		●	●									●	●									●															
	E	●												●	●								●															
	R		●	●										●	●									●														
	V	●												●	●									●														
	X	●	●	●										●	●									●														
	Y			●	●										●									●														
中 (15)	G			●										●	●								●															
	K												●	●									●															
	M			●										●	●								●															
	O			●										●	●								●															
	P		●	●										●	●									●														
	T	●	●	●										●	●									●														
	U		●	●										●	●									●														
	Z													●	●									●														
	C													●	●									●														
	D		●											●	●									●														
低 (4)	F												●	●									●															
	H												●	●									●															
	L												●	●									●															
	Q												●	●									●															
	S												●	●									●															
	I													●	●									●														
	J													●	●									●														
N													●	●									●															
W													●	●									●															

カッコ内の数字は人数

英語で練習したい。私の日本語はあまり上手じゃない。私は日本語で質問しますが、友達は英語に変えます」と述べており、「便利ですが日本語をもっと話したい。…でも（地域交流では）全部日本語です。」とその意義を述べている。

一方、「中関心・不継続型」は、環境に対する肯定的認識は少なく、体験に関しては、明らかに否定的な認識が多い。特に、ほぼ全員が交流体験を「期待外れ」と考えていることは、特徴的である。日本社会における多様な体験を肯定的に捉えながらも、それは期待とは異なっていて、不満や失望を感じている。また、外国人に対する差別などの不快な体験により、交流意欲を喪失し参加意欲を失う者もみられた。体験を否定的に認識した場合は、そこで交流参加の意義についての再評価が行なわれ、継続しないという決定が下されることが多い。

参加継続グループと不継続グループを比較すると、同じフィールドを共有しながら環境への認識の差異が大きいことがわかる。最大の違いは、参加継続グループの学生は、学内と学外の機能を差別化して認識し、学内とは異なる交流内容に価値を見出していることであろう。例えばBは、交流参加理由を次のように述べている。

（大学に）仲のいい友達がいるから、（地域交流は）深く話す友達を作るためじゃありません。もっといろいろしたり、大学の友達と違う話をします…。（地域交流で会った人は）30代以上の人なので若者と違います。（…）秋田弁とか年上のカルチャーとか、でもここ（学内）は若者のカルチャー（…）地元のカルチャーの経験とか、秋田弁とか学生はあまりしゃべれないですし、いろいろ社会的な話題、30代以上の人から習った。

つまり、学内の友人と地域の人々とは、最初からつき合い方が異なるというわけである。一方、中程度の関心を持つ学生の中で顕著だったのは、地域交流に対する期待の高さである。日本語の上達、日本人との親密な人間関係、交流でのもてなし、特別な体験などを期待して交流に臨む者が多くみられた。そして前述の事例のように、結果が期待と異なる場

合には、それが否定的な体験と認識され、交流関心の喪失につながることも多かった。

最後に、初めから関心の低かった「低関心・不継続/不参加型」について検討する。ここでは、最初から交流不参加という決定をする者がいる。それ以外の者は、交流に参加し体験に肯定的認識を示す者もみられるが、参加は継続されない。その理由として、参加理由が、授業の一環、友人から誘いなどの外発的動機によるものであることが考えられる。彼らは「楽しかったが、特にまた行きたいとは思わない」と考えている者が多く、地域交流は、日本語の上達や文化理とは無関係だと考えている者もみられた。

以上の分析をもとに、交流前の関心度が異なっていた対象者がどのようなプロセスを経て交流参加の継続・不継続を決定したのかについて図1に表わす。

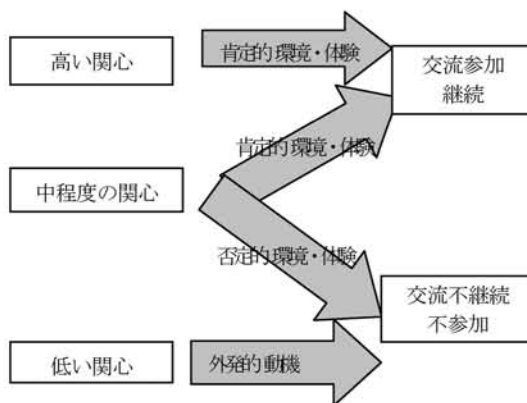


図1 交流継続、不継続の決定プロセスと要因

4.4 交流の影響による認識の変化

最後に、対象者の認識が交流体験によってどのように変化したかについて類型別に検討する。質問項目④の交流体験とそれによる変化についての回答を分析したところ、表2に示したように「高関心・継続型」と「中関心・継続型」には、多くの肯定的な認識の変化が見られた。具体的には「地域交流への関心の喚起」「コミュニケーションストラテジーの獲得」「自己効力感の向上」「日本語学習意欲増進」「日本文化理解の深化」「日本語力向上」の категорияが得られた。

この中で異文化交流の側面から注目すべき変化は、「地域交流への関心の喚起」であろう。最初は、他の目的達成のための手段として道具的に捉えられていた地域交流が、交流そのものに魅力を感じられるようになり関心が深まっている。Aはその変化について、「もっと日本語を話したいから（地域交流をしようと思った）。でもだんだん楽しくて勉強のためじゃなくなりました」と述べている。また、Xも「同じ人たちにまた会えると、だんだん仲良くなれて嬉しい」と継続的な交流により関係が深まっていく様子を語っている。それに伴って、地域社会やそこで暮らす人々への個別の関心、地域伝統文化への関心も芽生えている。交流前は、日本文化一般に対して漠然と抱いていた関心が、特定地域文化への関心へと変化している。交流で親密な関係を築いてきた個としての相手への関心の芽生えは、相手を〇〇人という属性ではなく、かけがえのない個人として認識することで構築される、他者との関係性の第一歩であり、交流継続のために重要かつ望ましい変化だといえよう。工藤（2009）は、短期海外研修プログラムの効果において、これを「新解釈」と呼び、最も強調すべきものと述べているが、ここでも地域交流を新たな解釈で捉え直そうとする様子が見えがえる。「コミュニケーションストラテジーの獲得」では、単語の羅列、文型の簡略化、日本語の上手な学生への通訳依頼などによってもコミュニケーションは可能であることの認識や、非言語コミュニケーションの重要性の再認識について語られていた。また、「日本語力の向上」や「自己効力感の向上」の自覚により交流参加の評価が高まり、さらに意欲も増すという肯定的な認識へとつながるケースも多く見られた。例えばAは、「私の日本語は上手になったと思います。特に話すことがよくなりました…もっと話したい」と語っている。「自己効力感の向上」では、教育機関などでの交流で自文化紹介や英語を教える活動などをして相手に喜ばれたことなども言及された。Vが自分自身を「useful だと感じられた」と述べているように、被支援者であることでの多い留学生が、支援者の立場となることで自己効力感を得られることは、留学生と地域住民との対等な

関係性の構築への一歩としても有意義であろう。

一方、「中関心・不継続型」と「低関心・不継続/不参加型」では、「あきらめ」「日本語意欲減退」などの「否定的変化」が認められた。交流により親密な人間関係が築けることを期待していた者は、否定的な体験や期待外れの交流により「交流に行ってもあまり仲良くなれない」（L）という認識に変わっている。また、日本語能力が思ったほど上達しないことで、日本語学習動機が減退し「短期間では日本語の上達は無理」（C）と結論づけた言及もあった。これらの結果をまとめると表3のようになる。

表3 交流の影響による認識の変化

	交流前	交流後
交流 継続	交流の道具的認識	交流そのものへの関心
	日本文化への一般的関心	特定地域文化への関心
	非個人的関係	個人的関係
	無力感	自己効力感の獲得
交流 不継続	コミュニケーション不成立	コミュニケーションストラテジーの獲得
	人間関係構築への期待 強い日本語学習動機	あきらめ/失望 学習動機の減退

5. 総合的考察

本研究では、短期留学生が地域交流について、どの程度関心を持っており、実際の体験をどのように認識して、参加、不参加の意志決定をするのか、また、交流の影響によって認識にはどのような変化があるのかについて検討してきた。その結果、地域交流に対する最初の関心度が高い者は、環境や体験を肯定的に認識し継続的参加をすること（高関心・継続型）、最初の関心度の低い者は、肯定的な体験をしても継続した交流へとは至らないこと（低関心・不継続/不参加型）が見出された。また、関心度が中程度の者は、肯定的な環境認識や交流体験により、認識も肯定的に変化し、関心度も増していくというプラスの循環が生まれる可能性が強いこと（中関心・継続型）、反対に否定的な環境認識や交流体験をする場合は、交流参加は不継続となること（中関心・不継続型）、などが明らかとなった。

以上の点から注目されるのは、最も流動的で、継続参加へ至る可能性の高いと考えられる、関心度が中程度の学生への対応である。短期留学生は、最

初から地域交流を目的としているわけではなく、交流関心度も特に高くも低くもない対象者が大多数であった。それが結果的には、交流継続と不継続へと分かれていく。より多くの学生を交流継続へと向かわせるためには、どのような方法が効果的であろうか。中関心・不継続型で顕著だったのは、地域交流への期待が高く、結果が期待外れになることで体験を否定的に認識し関心を失っていく例であった。これは逆の観点から考えると、期待に即した体験をすることでプラスの循環への軌道修正が可能であるということである。これに対する有効な方法としては、教育的介入が考えられる。加賀美（2006）は、教育的介入を「一時的に不可避な異文化接触を設定することで、組織と個人を刺激し、学生の意識の変容を試みる行為（p.77）」と定義し、大学キャンパス内の異文化交流促進において効果をあげている。また、阿部（2009）は、教員が予め交流団体との調整を行ない、授業の一環としての地域交流を実施することで、学生と地域住民の双方への学びをもたらしている。このように、満足度の高い体験を得るためには、日本人学生を巻き込んだり、授業の一環としてプログラム設定することで、教員がある程度の制御力を持つことなどの教育的介入が検討されてもよいのではないか。それにより交流体験が肯定的に認識されれば、好循環へつながる可能性も充分考えられる。その際介入が、強制的な圧力ではなく、効果的な体験プログラムとして、肯定的に受けとめられるような慎重なコースデザインが求められる。

また、前述の学生Bの言及のように滞在期間の短い留学生にとっては、地域交流と学内の交流を分けて認識し、地域交流に対し過度な期待を抱かず、ある程度割り切った考えで臨むという態度も興味深い示唆である。これは、決して否定的なあきらめではなく現実を見据えた方略と考えられる。

最初から関心度が低い学生に対しての交流促進は、容易ではないかもしれないが、日本語上達には関心があるが、それを地域交流とは切り離して考えている者に対しては、「何のために日本語を上達させたいのか」というメタレベルの認識を促すことで効果があるかもしれない。日本語上達は最終目的で

はなく、例えば「インタラクションのための手段」、「相手と親密性を深めるための方法」であると考えられた場合は、地域交流への関心も喚起される可能性があるだろう。

最後に、個人と個人を取り巻く社会的環境の重要性について触れておきたい。地域交流は、個人の交流関心や肯定的な認識の仕方と、大学の支援体制や地域社会の好意的な状況などの環境という両者の相互作用により、はじめて促進されると考えられる。今回のフィールド校は、立地的には地域交流がしやすいとはいえない環境であったが、大学側が留学生に対して多くの交流の機会を提供し、支援体制の整備や肯定的な環境づくりに気を配っていた。対象者の日本社会や地域社会への環境認識には否定的なものもあったが、学内に関しては概ね肯定的な認識をしていたことから、それが実証されており、今回の分析結果に肯定的な影響を与えていたと考えられよう。阿部（2013）は、日本人留学生が海外留学した場合の地域参入について、交流関心が低くても社会環境やサポート資源の提供により地域参入が可能であり、反対に関心が高くても、社会的支援が獲得しにくい状況では参入には至らないという結果を示している。このことから、留学生の地域交流活動の促進には、大学と地域社会との連携した支援体制作りの重要性が示唆される。

6. 今後の課題

ここまで、留学生の地域交流への認識や現状を踏まえ、交流促進のためにいくつかの提言を行ってきた。本稿では留学生の観点から地域交流を取り上げたが、地域住民との関係性を考え、それを地域社会との互恵的援助関係へと発展させるためには、地域社会側が留学生をどのように受けとめているのかという観点からの調査が不可欠となる。また、留学生が所属する大学の地域貢献への方針や、地方自治体の国際化や外国人住民との共生社会へ向けての取り組み方による影響も大きい。大学、地域住民、行政の留学生交流に対する認識を踏まえた広がりのある研究が必要であると考えられる。

参考文献

- 阿部祐子 (2009) 「共通課題の達成による親密化の深まりについて—多文化クラスにおける地域参加の事例から—」 WEB 版日本語教育実践研究フォーラム報告
- 阿部祐子 (2013) 「日本人短期海外留学生の地域社会への参入—面接法による質的データ分析の試み—」 『コミュニティ心理学研究』 16 (2), 178-192.
- 江淵一公 (1997) 『国際化の研究』 玉川大学出版部
- 大島まな・田村知子 (2001) 「留学生を活用する国際理解教育の内容・方法と教育効果に関する研究 (その 1) —大学周辺地域の小学校との国際交流活動を中心に—」 九州共立大学・九州女子大学・九州女子短大編 『生涯学習研究センター紀要』 6, 59-80.
- 大西晶子 (2008) 「留学生と日本人の対一交流プログラムにおける交流実態に関する研究—その 1: 交流の全体像—」 異文化間教育学会第 29 回大会抄録集, 62-63.
- 加賀美常美代 (2006) 「教育的介入は多文化理解態度にどんな効果があるか」 『異文化間教育』 24, 76-91.
- 川喜田二郎 (1967) 『発想法 - 創造性開発のために -』 中公新書
- 久保田賢一 (2003) 「『総合的な学習』における異文化間教育」 『異文化間教育』 17, 異文化間教育学会, 12-25.
- 工藤和宏 (2009) 「日本の大学生に対する短期海外語学研修の教育的効果—グラウンデッド・セオリー・アプローチに基づく一考察—」 『スピーチコミュニケーション教育』 22, 117-139.
- 白土悟・高松里 (1999) 『外国人留学生の相談指導のためのガイドブック』 九州大学留学生センター, 40.
- 武田里子 (2002) 「留学生支援を魅力ある地域づくりへ—うおぬま国際交流協会の事例—」 日本学生支援機構 『留学交流特集・留学生と地域をいかに結びつけるか』 12-13.
- 花見禎子・橋本顕彦 (2001) 「小学校における国際理解教育と留学生交流」 三重大学留学生センター 『三重大学留学生センター紀要』 3, 25-40.
- 横田雅弘・白土悟 (2004) 『留学生アドバイザー—学習・生活・心理をいかに支援するか—』 ナカニシヤ出版, 226-256.
- 文部科学省 (1997) 留学生政策懇談会第一次報告「今後の留学生政策の基本的方向について」
http://www.mext.go.jp/b_menu/shingi/chousa/koutou/015/toushin/970701.htm (2012年12月10日閲覧)

あべ ゆうこ／国際教養大学 国際教養学部
yukoabe@aiu.ac.jp

The perception and the process of decision making of community involvement participation of international students in Japan

ABE Yuko

Abstract

This paper investigates the relationship between the level of original interest in local community involvement and the factors involved in making decisions to engage, continue or discontinue such involvement among study abroad students in Japan. It addresses the issue of the evaluation of social environment and the experience of being involved on students' decisions. Data for the analysis were collected through half-structured interviews with 26 international students in Akita, Japan. The outcomes of the qualitative analysis refer to these four categories: 1) high interest - continuing, 2) middle interest - continuing, 3) middle interest - discontinuing 4) low interests - discontinuing. Category 1) and 2) students perceive their social environment and experience of the local community involvement positively and continue the community involvement activities. Category 3) students perceive them negatively and discontinue the community involvement activities, and although some Category 4) students perceive their experience positively, they discontinue said activities. The paper includes analysis of students' positive transformations under influence of community involvement.

【Keywords】 community involvement, community exchange activities, study abroad students, transformation of perception

(Department of International Liberal Arts, Akita International University)